

内分泌疾患と核医学

司会のことば

染 谷 一 彦 (聖マリアンナ医科大学第三内科)

小 西 淳 二 (京都大学医学部核医学科)

内分泌器官はそれぞれユニークなホルモンを分泌し、生体の機能調節に大きな役割を果たしている。核医学診断法はこのような内分泌器官のもつ特異的機能の評価に適していることより、*in vitro* および *in vivo* 検査の両面において古くから活用されてきた。中でも甲状腺や副腎の機能画像は、トレーサ法としての核医学検査の本領がいかに発揮されている領域の1つである。一方、核医学の治療への応用は今後大いに発展が期待される領域と思われるが、現在のところほとんど内分泌領域に限られている。そこで、本シンポジウムではこの領域における核医学の進歩を大きく診断と治療の二つの面に分け、それぞれの分野の第一線の先生方にお話いただき、討論を進めることにしたい。

診断面では下垂体、甲状腺、カルシウム代謝および副腎髄質を取り上げる。内分泌系のかなめである下垂体の診断はこれまで *in vitro* でのホルモン測定と X 線 CT による形態画像に頼ってきたが、核磁気共鳴現象にもとづく MRI の導入により、形態診断の面で大きな進歩がみられたのみならず、視床下部-下垂体系の機能評価も可能とな

りつつある。甲状腺ではこれまで種々のシンチグラフィが開発されてきたが、形態画像としての超音波検査の普及が目覚ましい今日、核医学画像診断法の果たすべき役割について見直してみるべき時点と思われる。カルシウム代謝については最近特に注目されている骨粗鬆症を中心に核医学検査による病態解析の現況を報告して頂く。副腎では長い間待たれていた髄質のイメージング剤としての ^{131}I -MIBG の登場が画期的な進歩をもたらしている。さらに、この製剤は悪性褐色細胞腫の治療への応用が注目されている。

治療面の代表としては甲状腺における ^{131}I 療法がある。RI 標識抗体による癌の治療など RI 治療の新たな展開が期待されている今日、すでに長い歴史を持つパセドウ病と甲状腺癌の ^{131}I 療法についてその有用性と限界を知ることは意義深いことと思われる。

診断と治療の両面で核医学の果たす役割が大きい内分泌領域での最近の進歩をまとめるとともに、今後の発展の可能性を探る意味で、大いに活発な討論が展開されることを期待したい。